

学問のすゝめ 十六編 福沢諭吉著

手近く独立を守る事

不羈独立の語は近来世間の話にも聞くところなれども、世の中の話には随分間違もあるものゆえ、銘々にてよくその趣意を弁えざるべからず。独立に二様の別あり、一は有形なり、一は無形なり。なお手近く言えば品物につきての独立と、精神につきての独立と、二様に区別あるなり。品物につきての独立とは、世間の人々が銘々に身代を持ち銘々に家業を勤めて他人の世話厄介にならぬよう、一身一家内の始末をすることに、一口に申せば人に物を貰わぬという義なり。有形の独立は右の如く目にも見えて弁じ易けれども、無形の精神の独立に至ってはその意味深くその関係広くして、独立の義に縁なきように思わるる事にもこの趣意を存して、これを誤るもの甚だ多し。細事ながら左にその一箇条を撮ってこれを述べん。一杯、人、酒を呑み、三杯、酒、人を呑むという諺あり。今この諺を解けば、酒を好むの慾をもつて人の本心を制し、本心をして独立を得せしめずという

義なり。今日世の人々の行状を見るに、本心を制するものは酒のみならず、千状万態の事物ありて本心の独立を妨ぐることも甚だ多し。この着物に不似合なりとて、かの羽織を作り、この衣裳に不相当なりとて、かの煙草入を買い、衣服既に備われば屋宅の狭きも不自由となり、屋宅の普請初めて落成すれば宴席を開かざるもまた不都合なり、鰻飯は西洋料理の媒妁となり、西洋料理は金の時計の手引となり、此より彼に移り、一より十に進み、一進また一進、段々限りあることなし。この趣きを見れば一家の内には主人なきが如く、一身の内には精神なきが如く、物よく人をして物を求めしめ、主人は品物の支配を受けてこれに奴隷使せらるるものと言ふべし。なおこれより甚だしきものあり。前の例は品物の支配を受くる者なりと雖ども、その品物は自家の物なれば、一身一家の内にて奴隷の堺界に居るまでのことなれども、爰にまた他人の物に使役せらるるの例あり。かの人がこの洋服を作りたるゆえ我もこれを作ると言い、隣に二階の家を建てたるがゆえに我は三階を建

つると言い、朋友の品物は我買物の見本となり、同僚の噂咄は我注文書の腹稿となり、色の黒き大の男が節くれ立つたるその指に金の指輪は些と不似合と自分も心に知りながら、これも西洋人の風なりとて無理に了簡を取直して錢を奮発し、極暑の晩景浴後には浴衣に団扇と思えば、西洋人の真似なれば我慢を張つて筒袖に汗を流し、只管他人の好尚に同じからんことを心配するのみ。他人の好尚に同じうするはなお且つ許すべし、その笑うべきの極度に至つては他人の物を誤り認め、隣の細君が御召縮緬に純金の簪をと聞きて大いに心を悩まし、急に我もと注文して後によくよく吟味すれば、豈計らんや、隣家の品は綿縮緬に鍍金なりしとぞ。かくの如きは則ち我本心を支配するものは自分の物に非ずまた他人の物にも非ず、煙の如き夢中の妄想に制せられて、一身一家の世帯は妄想の往來に任ずるものと言つべし。精神独立の有様とは多少の距離あるべし。その距離の遠近は銘々にて測量すべきものなり。かかる夢中の世渡りに心を勞し身を役し、一年千円の歳入も一月

百円の月給も遣い果してその跡を見ず、不幸にして家産歳入の路を失うか、または月給の縁に離れることあれば、氣拔の如く、間拔の如く、家に残るものは無用の雑物、身に残るものは奢侈の習慣のみ、憐れと言つても尚おろかならずや。産を立つるは一身の独立を求むるの基なりとて心身を勞しながら、その家産を処置するの際に、却つて家産のために制せられて独立の精神を失い尽すとは、正にこれを求むるの術をもつてこれを失うものなり。余輩敢えて守錢奴の行状を称譽するに非ざれども、ただ錢を用いるの法を工夫し、錢を制して錢に制せられず、毫も精神の独立を害すること勿らんを欲するのみ。

### 心事と働きと相当すべきの論

議論と実業と両ながらその宜しきを得ざるべからずとのことは普く人の言つところなれども、この言つところなるものもまたただ議論となるのみにして、これを實地に行う者甚だ少なし。そもそも議論とは心に思うところを言に発し書に記すものなり。或いは未だ言と書に発せざれば、これをその人の心事といひまたはその

人の志という。故に議論は外物に縁なきものと  
言ふも可なり。必竟内に存するものなり、自由  
なるものなり、制限なきものなり。実業とは心  
に思うところを外に顕わし、外物に接して処置  
を施すことなり。故に実業には必ず制限なきを  
得ず、外物に制せられて自由なるを得ざるもの  
なり。古人がこの両様を区別するには、或いは  
言と行といい、或いは志と功といえり。また今  
日俗間にて言ふところの説と働きなるものも即  
ちこれなり。言行齟齬するとは議論に言ふと  
ころと実地に行ふところと一様ならずと言ふこ  
となり。功に食ましめて志に食ましめずとは、  
実地の仕事次第に由りてこそ物をも与うべけ  
れ、その心に何と想うとも形もなき人の心事を  
ば賞すべからずとの義なり。また俗間に、某の  
説は兎も角も元來働きのなき人物なりとてこれ  
を軽蔑することあり。何れも議論と実業と相当  
せざるを咎めたるものならん。さればこの議  
論と実業とは、寸分も相齟齬せざるよう正しく  
平均せざるべからざるものなり。今初学の人の  
了解に便ならしめんがため、人の心事と働きと

いう二語を用いて、その互いに相助けて平均を  
なしもつて人間の益を致す所以と、この平均を  
失うよりして生ずるところの弊害を論ずること  
左の如し。第一 人の働きには大小軽重の別  
あり。芝居も人の働きなり、学問も人の働きな  
り、人力車を挽くも、蒸気船を運用するも、鋤  
を執りて農業するも、筆を揮つて著述するも、  
等しく人の働きなれども、役者たるを好まずし  
て学者たるを勤め、車挽の仲間に入らずして航  
海の術を学び、百姓の仕事を不満足なりとして  
著者の業に従事するが如きは、働きの大小軽重  
を弁別し、軽小を捨てて重大に従うものなり。  
人間の美事と言うべし。然り而してそのこれを  
弁別せしむるものは何ぞや。本人の心なり、ま  
た志なり。かかる心志ある人を名づけて心事高  
尚なる人物という。故に云く、人の心事は高尚  
ならざるべからず、心事高尚ならざれば働きも  
また高尚なるを得ざるなり。第二 人の働き  
はその難易に拘わらずして用をなすの大なるも  
のと小なるものとあり。囲碁商議等の技艺も易  
き事に非ず、これらの技艺を研究して工風を運

らすの難きは、天文、地理、器械、数学等の諸件に異ならずと雖ども、その用をなすの大小に至つては固より同日の論に非ず。今この有用無用を明察して有用の法に就かしむるものは、即ち心事の明らかなる人物なり。故に云く、心事明らかならざれば人の働きをして徒に勞して功なからしむることあり。第三 人の働きには規則なかるべからず、その働きをなすに場所と時節とを察せざるべからず。譬えば道德の説法は難有ものなれども、宴樂の最中に突然とこれを唱うれば徒に人の嘲りを取るに足るのみ。書生の激論も時には面白からざるに非ずと雖ども、親戚児女子団坐の席にこれを聞けば発狂人と言わざるを得ず。この場所柄と時節柄とを弁別して規則あらしむるは即ち心事の明らかなるものなり。人の働きのみ活潑にして明智なきは、蒸気に機関なきが如く、船に楫なきが如し。箇に益をなさざるのみならず却つて害を致すこと多し。第四 前の条々は人に働きありて心事の不行届なる弊害なれども、今これに反して心事のみ高尚遠大にして事実の働きなきもまた

甚だ不都合なるものなり。心事高大にして働きに乏しき者は常に不平を抱かざるを得ず。世間の有様を通覧して仕事を求むるに当り、己が手に叶う事は悉皆己が心事より以下の事なればこれに従事するを好まず、去迎己が心事を逞しうせんとするには実の働きに乏しくして事に当るべからず、是においてかその罪を己に責めずして他を咎め、或いは時に遇わずといい或いは天命至らずといい、あたかも天地の間になすべき仕事なきものの如くに思い込み、ただ退きて、私に煩悶するのみ。口に怨言を発し面に不平を顯わし、身外皆敵の如く天下皆不深切なるが如し。その心中を形容すれば、嘗て人に金を貸さずして返金の遲きを怨む者と言うも可なり。儒者は己を知る者なきを憂い、書生は己を助くる者なきを憂い、役人は立身の手掛りなきを憂い、町人は商売の繁昌せざるを憂い、廢藩の士族は活計の路なきを憂い、非役の華族は己を敬する者なきを憂い、朝々暮々憂いありて楽しみあることなし。今日世間にこの類の不平甚だ多きを覺う。その証を得んと欲せば、日常實際の

間によく人の顔色を窺い見て知るべし。言語容貌活潑にして胸中の快樂外に溢るるが如き者は、世上にその人甚だ稀なるべし。余輩の実験にては、常に人の憂うるを見て悦ぶを見ず、その面を借用したらば不幸の見舞などに至極宜しからんと思わるるものこそ多けれ、気の毒千萬なる有様ならずや。もしこれらの人をして各々その働きの分限に従つて勤むることあらしめなば、自ずから活潑為事の樂地を得て次第に事業の進歩をなし、遂に心事と働きと相平均する場合にも至るべき筈なるに、嘗て爰に心附かず、働きの位は一に居り、心事の位は十に止まり、一に居て十を望み、十に居て百を求め、これを求めて得ずして徒らに憂いを買う者と言うべし。これを譬えば石の地蔵に飛脚の魂を入れたるが如く、中風の患者に神経の穎敏を増したるが如し。その不平不如意は推して知るべきなり。また心事高尚にして働きに乏しき者は、人に厭われて孤立することあり。己が働きと他人の働きとを比較すれば固より及ぶべきに非ざれども、己が心事をもって他の働きを見ればこれ

に満足すべからずして自ら私に輕蔑の念なきを得ず。妄に人を輕蔑する者は、必ずまた人の輕蔑を免かるべからず。互いに相不平を抱き互に相蔑視して、遂には変人奇物の嘲りを取り、世間に齒すべからざるに至るものなり。今日世の有様を見るに、或いは傲慢不遜にして人に厭わるる者あり、或いは人に勝つことを欲して人に厭わるる者あり、或いは人に多きを求めて人に厭わるる者あり、或いは人を誹謗して人に厭わるる者あり。何れも皆、人に対して比較するところを失い、己が高尚なる心事をもつて標的となし、これに照らすに他の働きをもつてして、その際に恍惚たる想像を造り、もつて人に厭わるるの端を開き、遂に自ら人を避けて独歩孤立の苦界に陥る者なり。試みに告ぐ、後進の少年輩、人の仕事を見て心に不満足なりと思わば、自らその事を執つてこれを試むべし、人の商売を見て拙なりと思わば、自らその商売に當つてこれを試むべし。隣家の世帯を見て不取締と思わば、自らこれを自家に試むべし。人の著書を評せんと欲せば、自ら筆を執つて書を著わすべ

し。学者を評せんと欲せば学者たるべし。医者  
を評せんと欲せば医者たるべし。至大の事より  
至細の事に至るまで、他人の働きに喙を入れん  
と欲せば、試みに身をその働きの地位に置きて  
躬自から顧みざるべからず。或いは職業の全く  
相異なるものあらば、よくその働きの難易軽重  
を計り、異類の仕事にてもただ働きと働きとを  
もつて自他の比較をなさば大なる謬なかるべ  
し。（明治九年八月出版）